



尾志善



今年祇園百の十巻は報恩乃々此  
古史の満るを身一とて以てをうらむるの  
おめく若くはつらり連歌をうらむるを  
けし社堂をうらむる様ありて是も白楮ふ  
まのたうとせむるありし中より名刺をこ  
とする類ひもあやうく霊神のうらむるをけ  
さむるもつぎお友人魯のひはむありて葉を  
舞子花時鳥月雪乃ゆ糸をうらむるを白紙  
撰ふひそふそをうらむるふむよとてこの  
植物をもて時鳥ふすく乃生花をつくし  
月よのゆふ天象を以てて世をうらむるあり

浮物をこころせしむるもや 題ハおわくは  
ゆ時の多物そあつらふあけしこころし  
風情こころや也 古人梅を志き菊を  
せしむるは撰者よりのねをみたりあつた  
うたやとこころえ難しこころあけしこころ

天保十四年十月

豊中松云

尾花籠集上巻

花  
さくら

きのこころを花を河らうくわくは 江戸 由 松  
くハ過望日たまふれくまのえ 三 和  
うらかす竹のまうけを花の中 李 鏡  
船はちや花片る人のむらう 尾張 英 山

咲たぬむと惜くや角冠と日止虚白  
 不二も哀うそつとやむと盛い侍い甚  
 二階うく足みしと花と入江と 壺天  
 新まきと花の影いさりしと花と月 子鶴  
 退く花ゆく奉れ夕叶う久 深  
 秋の静残しと居る花足る 宗郎  
 曙やほろりとと花の露 寛二  
 志すしと向く春強ふと花冠 晨支

秋はむ痛くもるる花と 大坂 白 鷗  
 土川花や囀むとさうの早料理 其山  
 久野のけしと花と 林 曹  
 川舟や花のいさしと 佐 北 年  
 宵かたは燈火ととるの奥 惟 艸  
 花ちとやそとくさりと花と 尾 村  
 いさしと人との縁ととる 茶 山  
 ちとそとくさりととる 舟 九 蘇

唐十坪ふんくつ後きやむ月い大た彫  
富士晴く花ふ是と花うけを 千雅女  
明新を遠くまうぬ山乃花 多合  
鯨を花を舞ふお花の静心 陸言  
花より花をまうまうま 梨尾  
唐と揮降くあり花乃奥因松松兄  
孫を打車一のまうまの言サ又キ茂推  
客まんとまうまうりふ花おま箱雨堂

まらむや船古北山乃えい見外  
花のまをまうまう花や山の各 琴和  
聖とまうまうまのまおくれ 英父丸  
ちまうまうまうまのまおくれ 玉圃  
尺絃くや花のまおくれの月 揮石  
徳くまうまうまのまおくれ 伊映映門  
ひと海りわうまの静やまのまおくれ 後仙仙壺  
素足くまうまのまおくれのま 高峯



志のきくたむのありむのき いふ 翠之  
くふあやと花ふ心のくれり 翠木  
ゆたふくぬる花のちる時 一圃  
もさう何ふも花ふとありまを 翠木  
入る月花をとりけり ゆき 柳条  
花さるに我家と花のゆき いふ 雨蝶  
春うけをけり いふ 春をけり いふ 引二  
春やむの いふ 花より いふ 夕 いふ 古

花さる いふ やさく いふ 花さる いふ 雨さる いふ 翠池  
花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 鬼洲  
花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 山骨  
花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 山骨  
花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 山骨  
花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 花さる いふ 山骨

一樹宛たりて春のさくらば 音河  
 春くくく 笑うこやうく 河波 應吏  
 おーめおかたうぬ状や 鈴さくら 下毛 楓 関  
 せきせきくぬししきく 重 橋うぬ 白戸 孤 月  
 ちくちくくさくく 歩 鈴さくら 葉 山  
 毛ゆくと 踏也多や 山さくら 森 境  
 昂より 常おく 重 橋うぬ 竹 直  
 せきせきく せきせきく 重 橋うぬ 万 里

春さくらく や 常 次 下 鈴さくら 鈴さくら 一 山  
 咲つむゆくく や 鐘も 世の 春 三 正  
 春 音もくくく 春 鈴さくら や 重 橋 武蔵 宗 芝  
 春の 中 へ 人 上 城 へ ぬ 初 春 音河 石 介  
 雨 粒も 春 音も 春 音も 春 音も 京 松 室  
 ちくちく や 常 次 下 鈴さくら 鈴さくら 一 山 魯 心



軍と免と障子明るる夜に記 流 芝  
雪の帯を物さし 新 茶 古  
旅人の管笠志らき船乗れ 魯 心  
浮山あきき 綱を直のよき 芝  
ささくくと月舟を流し也 古  
今一着乃 此のぬき行 心

関所の魚つゝ、阿とハまつきて 芝  
世話一あくうつ閑帳乃 証 古  
ふくくく直る冬の花あき世 心  
笑ふうちよもえゆる温多つこれ 芝  
おまのたし一絡巾多し京因扇 古  
おくと指紗をうける指さし 心  
何やらう梢を流し入月照り 芝  
直くは火乃まらくときちる 古

うそをいふ事かゝる事尚ほ  
眼をまわつて尺草の十の毛  
道所了ハ崎の寺の花  
汗の蒲団をあらく落子  
春をわけて蕨折つてかま  
御花屋を十分首尾  
般若經拍子で久安覺より  
鑿持あゝ又相問はる

心 古 心 古 心 古 心 古 心 古

冬は香ありて井戸の吹くま  
風はりくと萩枯る春  
遠い子に心を志すね驛の  
蠟燭踏て春味さるき  
遠くをわけて掛し旅籠跡  
素名ありけり心やつく  
物乃木の上をわらうき白月  
さうらへ来しハ鹿と思つね

心 古 心 古 心 古 心 古 心 古

獨り矢たての暮よききけり  
 橋乃仕あけは金物をうつ  
 ちうほらと山吹もさく花の本  
 心——うすた 蚕見——ゆく  
 宵のほのまはるぬ暖さ  
 園糖衣ふさね——寝を挿出す  
 心 古 芝 心 古 芝

かりそえのふらふらと暮るる  
 草——草——ま 庭——蝶 喜心  
 着進き椽の柱に雲流ふ  
 おき——かすちお笠の骨くむ 落山  
 万りお若くもふ暖のこま 心  
 稲妻ふら——雲消る月 古

さう那岳の遊くこゆる山の露  
今年も温多場のまつり娘のよ  
媒をのさく悪りのまゝ免るり  
日傘を志のく雨ををらく  
本号乃篇と存する勅化お  
支取替りの傍お抗打  
月影を森をまぬく明鳥  
雪花菜は雪は連入新直

山 流 心 古 山 心 古

いそかき雪層と清君の空の時  
羽織の泥はのそく樹立  
花の枝さへ人持智の家根  
寄居家のちりく捨舟の舟り  
漂物と縁まはるるのりよく  
丁こくも見せし東鉄文  
伽骨まかきく湯の心  
おまうれとくこま新猫舌

山 流 心 古 山 心 古



雨の音もよみも一様花  
水壺  
ぬるむ境もふきぬ雨の音  
茶古  
体も壺茗杯も春の音  
心  
旅の道もくもく  
壺  
燕もかきこる雨の音も  
古  
糸の糸も夢の仲知も  
心

毛尺さこの湯も静まこも  
壺  
退けぬのこもぬ縁の音も  
古  
やうくと回つ目もしを打受も  
心  
中もえりもつる壺も  
壺  
水尺の煙もも自由な境も  
古  
あつりも壺もも壺も  
心  
籠の月もつる壺も  
壺  
山もつる壺の早も  
心  
壺

押せりし心くは戸を風の掃りし  
 あまのり物もまぬけつら  
 ゆらゆらと鏡のよする花の蔭  
 河をり過る雷を催す  
 意猶も夏の蔭のまらせり  
 古う集るまきかぬむちあ  
 青子達の前へかへす海あふり  
 煤をとれぬの今も静き心

雑用しりし心くは戸を風の掃りし  
 用ぬるらば珠粒を尋ね  
 縁を山斗て人よ指さる  
 粘をねる福の機よあはれ  
 窓のりし森を金する詠詞の湖  
 西を言ぬふつける 抱 枕  
 雲のりし名月をさるる 誓り  
 梨子に仕切る尻上りま

三

三







川風も善けりの中やわらわき人 わか 悠々  
夕べの月もあけぬ わか 暮れ 暮れ  
雲合の船中一葉をわらわき人 わか 只 清  
何れもわらわきの船もあけぬ わか 暮れ 暮れ  
夕べの月もあけぬ わか 暮れ 暮れ  
家無あるか わか 暮れ 暮れ  
道一 わか 暮れ 暮れ  
宵 わか 暮れ 暮れ

春 わか 暮れ 暮れ  
秋 わか 暮れ 暮れ  
月 わか 暮れ 暮れ  
あ わか 暮れ 暮れ  
時 わか 暮れ 暮れ  
池 わか 暮れ 暮れ  
さ わか 暮れ 暮れ  
名 わか 暮れ 暮れ

吹く風の中へ〜  
江左 炉 扇

〜  
最 亮

〜  
素 明

〜  
梅 堂

〜  
市 成

〜  
仁 宝

〜  
武 蔵 碩 布

〜  
江 左 麩 子

〜  
永 久

〜  
秋 香

〜  
猛 席

〜  
兜 籠

〜  
五 株

〜  
柳 菴

〜  
柏 景

〜  
玉 堂

清けゆく草々々々人時亭 平陸 野菜  
時亭秋時亭々々々々々々々々 山口 善陽  
何々々々人鐘つてまえまへまへ  
月其の秋自る前々々々々々々々 月丸  
時亭々々々々鐘撞くまへまへ 山口 雜舌  
時亭々々々々々々々々々々々々 柳我  
時亭降々々々々々々々々々々々 菊車  
時亭々々々々々々々々々々々々 一函

坂をゆく出合川々々々々々々 山口 素化  
湖々月々々々々々々々々々々々 雪丸  
里々々々々々又の秋々々々々々 白雅  
桑々々々々々々々々々々々々々 護岳  
帆々々々々々々々々々々々々々 山口 呂風  
時亭法々々々々々々々々々々々 山口 花交  
橋乃名々々々々々々々々々々々 吾成  
何々々々々々々々々々々々々々 草而



指撥の序付のある角口部屋  
くまね毛のきく腮をいへる  
いへいけのきく後乃物思ひ  
隣へ通へ木石のくおく  
掘打の伴信のく序の哉  
破船の沙汰のくくくけ  
ふくくくくくくくくく  
茶山子と腕を皆きくまぬ  
誓心誓心誓心誓心誓心

着く外にきくくくくく  
人頼まぬちとみく物  
寺地まくくくくくく  
碑まくくくくくくく  
結末のくくくくくく  
裾屑の掃けぬ置出  
半一合のきく小魚を臺の  
姑く見まぬくくくく  
心誓心全誓心誓心

なまじりたる心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

誓

心

誓

心

誓

心

誓

心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

静の心は静の心は静の心

誓

心

誓

心

誓

心

川風を舟を遠る懐く那 眞菜  
美草不結く船 暇く舟 魯心  
布着る下地の町 組  
銅壺の中は 汲りし  
遠くかゝる能く月 心  
山手紅糸 婦人 心

高旅所の暮暮 去れ秋 菜  
下駟をうし 痛む 心  
志ぬえ 美れと 菜  
昔花の細りや けぬ 菜  
志とあつれ 菜 重の降交 心  
瀬田を 舟 舟 心  
花と 新酒の 菜 月 菜  
法より 沙汰 菜 居る 心



籠 刺ぬらうちの目白の押合  
 きうとさくふ溜る状さし  
 花苗の程よかき、雲の細の玉  
 まる直の志をぬ察の切多  
 雲ふらふら程ぬま細流を  
 雲とさくふ溜る、さく  
 雲とさくふ溜るはありし是の候  
 雲物諸、さく、さく、  
 心 菜 心 菜 心 菜 心

雲羽織ぬらうちの目白の押合  
 伏見園扇と古心 雲つけ  
 雲の角小粒の叙舞のふ仕合  
 内膳をりのふ百連りあき  
 月影の如樹を焼く火の消る  
 紅葉時をる人も来る寺  
 ありてちのつ子好くはし  
 日よふあると喚ぶ蓋 箱  
 心 菜 心 菜 心 菜 心

善哉予も小隊を少郎のきく歩行  
 口約束乃輕い受けこ  
 書以て矢連の筆を紙落し  
 明らうちりし引ける活し端  
 生掛し芝し落し花のよと  
 艇出す維子の赤し勢を  
 心 菜 心 菜 心 菜

善哉此あふりぬ極り也 魯心  
 あり故きはつてし軒先 宇付  
 やりし謝しるる病は落込し 子付女  
 きしけ解多し 懐り 錦 生女  
 尺の月を霧を放し月を影 竹  
 桑山子下流へ 暮る 迄 心

あつふ茶よりさめく仕舞うと一酒  
坊は空をけし満倉より一威  
我物よりやうよとさす縁の口  
はらきほきれよとをき縁の  
とりはけし道とと岩のつる也  
大和編より家よりとさすえし  
阿たりかき集る森より旅鳥  
高園より本　まよんてつる  
心　竹　之　竹　付　心　竹　之

北条  
四

取立てし傘は雲霞志あり捨  
捨乃阿ちららと紙やうま所  
志しけ　多敷むの志上の魚の月  
苞乃紙を明　紙　紙より益  
思ふより工多官のわら　喜喜信  
またく豪乃つと用の仕度し  
命のたかきさふより新　寺系  
上総乃舞ふ思ふとくを  
心　竹　之　竹　付　心　竹　之

北条  
四

雲持り中は小魚なり刻と音  
 ちる川と見と置みはあは先  
 血乃を忘すうちのむち枕  
 階子成りりる人乃歌さ人  
 一艘を出たし陸とる帆しとる  
 月細くともきこる霧  
 霧乃揺るる河く緋の魚  
 やとともきれを梓新橋也  
 心 竹 之 竹 竹 心 竹 之

二三本中一熾のむつき  
 扇りる歌乃るる智こつき  
 夫とけく解さぬまゝ氣をす直し  
 初子とる為大あける抱極  
 起り出ると若其竹の花盛  
 於葉とけく濃の〜〜  
 之 竹 竹 心 竹 之

心こころをこころにこころにこころにこころに  
情なさけよりなさけをなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを

七

心こころをこころにこころにこころに  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを  
情なさけよりなさけをなさけをなさけを

七

知くいよも出さねと暮るん今とら巻  
 玄那  
 いつも迎むるかか新と風名  
 翠松  
 志の山ふ心苗養う自明日  
 生直  
 子規あゝ感王 遠け紫  
 利秋  
 そらこらと新徳舟よ素おく重  
 瓜谷  
 粉菜君とてまゐく  
 掌  
 純才  
 安中よし系のみとけよよく  
 凡具  
 知く又世も暮れもぬ家  
 霜我

十月と新うあつたはる  
 一話  
 是のころ多き寒也  
 梨忌  
 初一那みの酒と梅と一よの白心  
 河東  
 力うけあまううと新  
 柳葉  
 早うかゝ母のあつめる産ま産  
 泉舎  
 あり向新く夕月のまん  
 大勝  
 刈よる未織う籠るメ加減  
 為六  
 形も新うま新新秋の山  
 鳥吟

學寮乃門紅名札の讀魚々  
 外きく野ノ名推灯の弓  
 小口ノハ羨らぬ傍りの高田塩  
 持る詠も〜土田ノ空さよ  
 眼乃前ノ昔風俗尺をさる其  
 澄切の字ノ美ノ大音  
 揮石  
 休道  
 惟草  
 苔云  
 園菊  
 秋草

尾花籠集下卷

月

名月や月夜とを眼およよい風朗  
 名月や露をいりや〜名紅庵 權翁  
 名月や終日晴〜名海あり 全令  
 名月や文々暮の海〜秋宿中 運流  
 名月や文々暮の海〜秋宿中 運流

明月や花をえんねとかきつたを 京 梅通

庭のほしをよめるの月 江戸 為木女

名月やあふりけ山のあふり 味 舎

あふり 梅 雪

あふり 折 我

名月や津の遠き峰 布 国

蓋 雲 雲

名月や舟 千 成

あふり 一 瀬

あふり 百 丈

あふり 介 我

明月や旅 丁 知

あふり 名 名

名月 山 馬

料 緑 岸

明月 紫 人



龍さくく名月を数林の那江戸亭  
名月也海舟よまきき亭名文 扶國  
明月也山々名月亭恒出里 水壺  
旅うきし月尺今浦まき人の月 芳和  
明月也山々名月亭恒出里 其泉武蔵  
聖ハまき聖名此ありまきの月 暉岸  
沙信也ねと人此ありまきの月尺これ 其石  
明月也河まきまきまき川一ッ尾張 遠陽

めさくくまき名此ありまきの月尺これ尾張 南群  
沙先の物くく風まきまきの月 扑山  
今朝此の物ありまきの月尺これ 其居  
此物名も浪まきまきまきの月の月江戸 言山  
灯也ね家た名あま月尺これ 其文  
名月也邪戸まきまきの森一ッ 史静  
名月也居まきまきの帆のまきまき 素瓏  
名月也まきまきまきまきの月尺これ上野 西馬

うーの新人の踏む月尺の如武彦 南

癖のあるえはのさうやう乃月 四 楓

客と我新をうりあう月と宵幸陸 一 馬

明月也遊々早芳雲乃御 友 甫

名月如小ふりさうのぬ山の奥下野 又

明月也庭木を更の自は物と 嵐 富

晴日はさうくおきき月尺の如雪 餅 力

明月也十もたぬ星の数 月 芳

人行く先尺の上出きて雨の月 法 矣

細の本をさうのお人やおは月 一 裕

鼻さうくさうくさうのやの月後河 青 在

あさうさう又さうさうやあは月誠後 西 晴

風を西この名月ハ遠きさうり大坂 漢 史

初月やあはれさうさう流し煙に 推 陰

葉地と透石の出来く初月夜 概 歳

三日月や木も折るきあ〜境まに嵐牛  
竹伐を引出を却るや三日の月は埃高  
三日月よ小豆飯く〜出舟うき 思物  
新月や星一葉き世々軒のす 杖扎  
是了言う終る終あり月の空尾張 世音  
結搦し船の落替や月明り 而后  
冬く竹り月とありて空笠の〜武蔵 五渡  
夕月や〜ゆらめくを照らす人 家三

松乃月手前 甚けりま〜うれ 志山  
笠横よいき〜月の際る水伊勢 萩白  
りり吸ふありけり月のお松越は 風外  
よふ月けり〜〜まきき唐の末 夷則  
半粒屋〜生い〜くお〜月軟水 宜福  
柳葉と似〜釣船や月の海 克丸  
自空け〜く吹ぬけ〜月う照 多美吉  
船〜〜湯よ入ふ高き月軟水京 杜馨

更下と挿し見えぬ月の冷 陸奥 多代女  
 灯を消く置や月夜の家 江戸 小柳  
 夕暎と照あふ月の出汐小 波弱  
 月をくく一歌く在居の長巻 山 柀月  
 ふ是去一は月うく破巻 底 巴江尼  
 多好くく又る夜や月の雪 菊頃  
 心くくといまう出る涙 紀伊 閑那  
 雨の月半お取うくく任舞 任 葛古

月の中くく名特 出 月の中 二 丘  
 月夜おや梅きたる は 春 蛾  
 血くくや毎の上裁月の照 谷 鶯  
 鳥鏡の燈の輝たる月夜 荒 不  
 降くくく 荒 尺 歩  
 起くく 後 碧 山  
 暮くく 江戸 謝 堂  
 月代お本の舞 荒 生 霞

ふんふき船のうら〜や月の空 京 感年  
りき遊〜く其陰きむ十秋の月 吾昔  
〜〜〜のぬ〜〜〜  
明月や春は去りまきける風乃色 石 南之  
月らんきる望のき〜〜や田一枚 各由  
那を新を袂のきき月如く 瓜谷  
菫と山 持〜〜秋は月如うれ 大羽 古華  
月らん〜〜やい〜〜あ〜〜  
乙良 越後

地〜〜〜〜〜月見の性もれ 茶山  
何處〜秋の更け月のきりり 江 碓嶺  
〜〜〜の〜〜〜作〜〜也后の月 粗文  
澄丈の冷も〜〜〜や如ら〜月 枝玉  
た〜〜〜〜〜素宵乃如や後の月 洗笠  
明月やあ〜〜けけ例乃空 魯心

音に啼ぬ虫もその那丸月と宵 金令  
鞘豆つ——小麻乃下 魯心  
一糸心蕨根の芝草暗出り  
久——見ぬ商人能来り  
試れ肉よ糸——形も麻地酒  
う——ろ置——園扇尋枝 心令

此以ち揚屋通むと志さうり 心令  
晴るを志す——物も見ぬ  
之——日乃あやめ——も積木の版  
挿るけくち歌垣の山草む 心令  
小春風船乃出入も旅やうも 心令  
有折代も人象結枝 心令  
本寺に梅上流——月乃秋 心令  
吟乃聲に心——心集栗 心令

鐘乃真々守ぬの響を定使  
門に流るる鐘の手に拭  
我き如く花の梢にうらな中  
啼く鳥の声を如くききむす  
まねくよ返屈もせぬ壬生踊  
とすきくまらう子うやうや  
釣人の上手よ笑はるるあり  
折うくきく一故きふん屋の

令 心 令 心 令 心 令 心 令 心

作手場と輪の響も石の心  
陸まふあれはあふん干露盤  
伯父甥も中を何ふ遠く遠く  
精進路の奥にせふ巻紙  
病目うらと志と笑と一途の上  
砧打如き町尻あり月  
志とくく曇の如き霧深し  
新蕎麦よ時名おきくふり

令 心 令 心 令 心 令 心 令 心

無常と云ふは、經の常不性  
明者かゝる世をあら経教  
薩管はしるべきことなま  
ゆゑ心重きなり 兩を催も  
甚火をたふすけり 花は薩  
まゝくれと 攝まゝと人  
令心令心令心令心

輪書や無くくんまゝ  
聖山よりいふはうらま  
法はのま常高く 眞慧  
手明はうらま 金のみ  
むらうらま 未果柳は 芽組也  
砂より乳 乾く 陽美は  
兼心兼心兼心兼心



日た水くまら成たつる字著清  
 袴をかき了仕舞 無造作  
 けしきまの然り少き砂糖壺  
 北より風お過き家招意  
 鶺鴒も千尋よりうら浮丸右  
 迷子哉つぎて帰るうらこむ  
 明あき月の清也ひる草  
 隣ち早く井戸敷をかき取  
 心 菜 心 菜 心 菜

油屋も米屋も交る揚屋丁  
 別きといふ人とは縁を弾  
 法中くとるのうらむ心あふり  
 包んて置けたまのぬけぬ海苔  
 啼煙吐しの強う空う成  
 日如く志きる掛物の友に  
 六才の城の掃除を庭に入き  
 起る草花の久きう明州  
 菜 心 菜 全 心 菜 心 菜





磨之了 燒之了 葉を捲む之了  
 疊之 蟻を掃 出を内  
 向之 心 雲之 心 嶮之 心  
 淵田 別を 多 心 其  
 西之 心 吾多 心 心 心 心  
 い 心 心 心 心 心 心 心  
 校 留 心 心 心 心 心 心  
 心 心 心 心 心 心 心

心 心 心 心 心 心 心  
 草 心 心 心 心 心 心  
 拜 殿 心 心 心 心 心 心  
 能 書 心 心 心 心 心 心  
 高 心 心 心 心 心 心  
 秋 心 心 心 心 心 心  
 心 心 心 心 心 心  
 寺 心 心 心 心 心 心

修多羅人の多いよるを修多羅

心

通る車はむくも一物

物

おと踊る舞を修多羅の音へ

心

修多羅のかけり盡る苦海

心

養父の支度と風呂と汲こせ

心

門田うしうしと修多羅の林と

執事

修多羅の修多羅の修多羅の奥 遠 淵

修多羅の修多羅の修多羅の奥 修 心

司石草履と修多羅の修多羅の奥 淵

早修多羅の修多羅の修多羅の奥 心

葉苗の次修多羅の修多羅の奥 淵

日和都合の修多羅の修多羅の奥 心

十五

岸のり歩ふされば御辱特  
かゝる心憂ふむら旅をよら  
彼者袴を小袖のりふかく置  
けり遊べ多敷候つきあき  
四五尺ち丈夫袴の秋の空  
きしむ憂を跡も悔得  
散る日目をく人の氣のよき  
半八の泣きよき余ありけり  
心 測 心 測 心 測 心 測

安くと那古流しあや小海盛  
をかゝる心阿る旅り患難  
月と見ぬ沙汰の宵も成る  
戸新明建りしあや出屏  
心 測 心 測

未満

雪

まつ雪もまき〜にまき庵の苔 は 護物  
 初雪お岬の儼き小家よ は 仙危  
 降つ〜まの雪ら〜きき は 干魚  
 まの雪お傘さし人きけ〜き は 松花  
 まの雪お織見せり抄うぬ は 奇山  
 まの雪お出海〜まらうと船橋 は 橋路

二度あり〜まの雪見る は 麓うん お 如  
 まの雪の〜山まの降る は 秋の は 英史  
 初雪お尋ふおさる は 翠物うぬ は 竹鈴  
 雪たりお岬根の家り は 十ヶ は 山外  
 生垣や花出〜け は 雪の は 完 ま 芳英  
 梅さ〜雪つむ中よ は まの は 左 は 砥  
 茶葉 は ぬら〜つ は まの は 茶 は 聯  
 海山乃 は 結更 は 雪 は 能 は 報 は 明 は 久 は 井 は 之

爪足之々<sup>つ</sup>あつまる雪は抄れ 伯志  
大あつ<sup>つ</sup>つみあつるを雪の重 雪蒲  
むとま<sup>く</sup>の先<sup>ま</sup>を<sup>ま</sup>抄<sup>り</sup>や垣<sup>り</sup>雪<sup>下</sup> 幻<sup>終</sup>芝  
見<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>雪の境の<sup>つ</sup>つ<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 昌<sup>結城</sup>  
ま<sup>く</sup>み<sup>み</sup>あ<sup>り</sup>ま<sup>は</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 一<sup>幸</sup>飛  
尺<sup>く</sup>尺<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>て<sup>て</sup>征<sup>く</sup>打出<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>雪の家<sup>江</sup> 竹<sup>石</sup>烟  
雪<sup>く</sup>と<sup>と</sup>取<sup>く</sup>清<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>の<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 古<sup>く</sup>栗  
雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>尺<sup>く</sup>尺<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>る<sup>く</sup>人<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 祖<sup>く</sup>々

麦<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>け<sup>く</sup>れ<sup>く</sup> <sup>大</sup>鼻<sup>右</sup>左  
り<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>る<sup>く</sup>雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>の上<sup>く</sup> 素<sup>く</sup>屋  
雪<sup>く</sup>や<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>け<sup>く</sup>く<sup>く</sup>構<sup>く</sup>杞<sup>く</sup>の<sup>く</sup>靴<sup>く</sup> <sup>は</sup>生<sup>右</sup>豆  
押<sup>く</sup>せ<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>戸<sup>く</sup>を<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>や<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>の<sup>く</sup>靴<sup>く</sup> 曉<sup>く</sup>鳥  
雪<sup>く</sup>乃<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 左<sup>く</sup>止  
雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>門<sup>く</sup>録<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>掃<sup>く</sup>せ<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 北<sup>く</sup>因  
雪<sup>く</sup>と<sup>く</sup>初<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>み<sup>く</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>上<sup>く</sup> 千<sup>く</sup>休<sup>く</sup>女  
乙<sup>く</sup>雪<sup>く</sup>乃<sup>く</sup>録<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup>雪<sup>く</sup>の<sup>く</sup>限<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>く<sup>く</sup> 風<sup>く</sup>光



人言ち従ありけり。室に坐出羽 玄子  
 憊心のいね。いんゆわ室の家上徳 霞雪  
 輝く。少る。室のまゝ。わ片巻左いふ 是菜  
 室刻。家のか。室わ山乃町 柳承  
 畏りける。丈を。室。い。門。回。り。ち 喜樂  
 室止ん。果なき。原の月。起。す。名。舎  
 陣。細。る。室。や。う。し。ふ。ふ。の。月尾張 月底  
 一村に。家。敷。も。見。え。ず。積。る。室 應知

秋乃。月。よ。ま。り。付。青。や。室。能。鹿 玄那  
 朝。の。ま。う。室。は。岩。折。い。い。の。今。先淡路  
 加。し。池。い。皆。掃。こ。む。也。危。の。室伊豫 恙推  
 層。鴨。の。阿。せ。り。暮。る。る。深。室。はいふ 元真  
 陣。室。や。室。を。鼓。ね。た。は。あ。く。ん。山。樹  
 ね。の。め。も。い。ま。の。ち。室。家。を。積。る。室 霜。峨  
 出。り。く。と。室。積。る。也。や。山。春 甘。志  
 室。能。前。室。う。い。た。の。陣。も。う。り 蒼。子



あまの毎より月カこり那 字付  
まをといふはあむこりの出れ 二折  
ねう枝ふれを持て終る雪 結石黒  
若柳や汐はねしめる雪のうへ 雪舎用  
終鳴る雪の庭乃 鳴りこね 以下為山  
向ふまゝやうもて終る小雪れ 糸景  
済るまゝさうらふおらう 為雪のうへ 魯心

取のけり 秋文とあつる 粉炭のれ 魯心  
多んく まは重くあつる 音 候 齋  
大川へ 出る 幾乃 あと 終る 心  
看は 終る まゝ い 鉛 高  
有は 磯人 町乃 都 掛 心  
ね ま なる 石乃 露の 流る 高

啄木鳥は木をくち居甘ぬ海り  
雲は機を吐きたる藍信  
涼切をくくく曇る露一物  
旅はけりき祥き水粥  
むかしと暮るるりも四月を  
長は砂花一葉のうた  
しらわつる葉一宿屋のけ立  
とれは交りて息を仕るる

心 鳥 心 鳥 心 鳥 心

あとの心は踊る身をきりあせり  
神ころ舟のきりぬ秋風  
朝の月夜はととれ松木垣  
通るきりむりもは内をきり  
分別を自分極めよとく  
始末と云る方々年若  
陸地うら肩のひらき土大粒  
所は油と暮れはけり継ぐ

心 鳥 心 鳥 心 鳥 心

山崎の五里やまのうらを信し  
市崩き立依りて天の  
又中々如き叫の尻かーら  
起りてそむいへて樹影も也  
むー暑き子刻以り月の影  
隣は板をり川に植へやら  
清袋よりそはてて物へて旅屋へ  
辱をんると眼の法くふる  
心 高 心 高 心 高 心 高

常山より山言さらゆる十五日  
あー程きこゆすまはいそし  
そんくうとたねをーあゝ報法屋敷  
有居のうらへて報生え也  
花より陰をー子抱子と起らんく  
寄きやまへてて磯へ色貝  
心 高 心 高 心 高 心 高

吾れ日の暮れ出れ渡りて那 是道  
川より西より 甚 皆 引 魯 心  
二里居るる歩行高れ肩明き 南 二  
百廿三歳 多き入てうもん  
板敷をいつくきしと月威  
目より心沙急き 四より出ん 二 心 道

窮屈を帯ふ異れ所りたり 道  
概り招き高坂のとり法き 心  
十日程訓て通るぬれ春 二  
まゝく小膠好く丸く 層 道  
て心終いゝ俵より丸れ指ひ目付 心 二  
駕りしをこれ言候し 身 道  
好めくとも衆る面より人月取 道  
施録鬼崩き 寺の志川より 心

秋風新何内一遠み出高心  
多つて心より新婦の聲をきこむ  
花乃陰より花をさかす所あり  
風は夜多しと際乃りある也  
此乃水ありなきより水  
少しと水の形ぬふ自由さ  
花指した力落しをゆるさばし  
雪哉もくろむ心はつとま

二 心 道 二 心 道 二

新新皮むくも中く多際之  
ちやんとつとつと新新飯櫃  
海見ゆる観音寺新新とつ椽  
月もそちこち上とまきしき  
垣新新とつ割をそとむる細上落  
三年哉乃旅新新店ちん  
峯のふとふ業新新とつ後加減  
田乃知新新とつ森のむとつと

二 心 道 二 心 道 二

誰より恋り思けし後も此本橋  
 起しと鏡に影を抱く  
 明志し心定む花のまじり也  
 吹草は炭より輝き火移り  
 花咲き時中五布あつしき  
 管より川 生るる金と形く  
 二心道二心道

有仙乃雲よりめけぬ美より  
 月河より歌 船よりあり風 光丸  
 細くく病をぬきを遊する 清美  
 垣より板戸に寄せりけり 丸  
 籠りより浸りし流し落の臺 心  
 美し和見より雉子に啼けり 美



新羅の山里に  
とくくまの  
妻造作を思案  
流きぬと  
組よと長刀鋒  
派子に  
思ふ  
みえん  
心 丸 矣 心 丸 矣 心 丸

十三夜津つきた  
存る  
田久  
為く  
頼  
今  
貴  
義  
心 丸 矣 心 丸 矣 心 丸 矣 心 丸

ほろろと類をわきし飯の湯氣  
標ありし萩の心うけしき  
山伏の豆餅茶を煮て折  
踏合へししらむ語の言飛  
たふせぬを例え敷よこまさせ  
後乃語をうけし若初敷  
まろくと筆の紙をみかめ  
紙乃俵を担敷ふきや  
美 心 丸 美 心 丸 美 心 丸 美 心 丸

波濤を堤り松のうきと里  
反古もさき各古心性面  
阿多しの流くまききつしき  
身も用乃きりる年頃  
よきとふれくむる層是  
やまむしやふまはたむし  
美 心 丸 美 心 丸 美 心 丸 美 心 丸

貞お

山をわたりて花を採りて揚をまきり 糸 年丈  
橋をわたりて鐘を打ちて寮の裏 然池  
うきをむきまのこころと作り年籠 荏皮  
けさの夜星をまきりて明をまきり 松秀  
坂をまきりてまのこころと作り年籠 生尔  
夢をわたりて花を採りて揚をまきり 糸 年丈

向いあふ家も花の春 松崎  
雪をわたりて花を採りて揚をまきり 荏皮  
明のこころと作り年籠 松秀  
夫は川をわたりて花を採りて揚をまきり 生尔  
嘆をわたりて花を採りて揚をまきり 糸 年丈  
まのこころと作り年籠 荏皮  
若くむきまのこころと作り年籠 松秀  
松をわたりて花を採りて揚をまきり 糸 年丈

一日舟よりてはびんとて安海生龍 大莫  
岩くまへてさけりもや枯尾りえ 常雅  
山見せしゆもさうぬ秋の自仙臺 一止  
そしむ日のまきくまもま生 白然  
病はらぬ、旅の常く唐の考武蔵 九舞  
張るるの極りのさ人余をりな 正价  
折打をかきこき、ゆる涼武後 有衣  
数ふまよんおらるる常をさうけり 甚宝

一口の予りうゑるまへに色くれい 樂史  
八月や湊遊女の舟へ乗る 一丈  
さしゆりて打つけりもさう清き名ま 天遊  
兼ちむもらるるりもさうぬ土塔り 一火  
さしためも是に伸くさる折武 南華  
まらるや疎くさうりぬのりさる 如九

心呂波貞

人を為す時をよむ人なり  
 祖文  
 此れよくとまふ実け入  
 美古  
 舟國の家を流し建す  
 祖郷  
 釣も羊鞋の紐を引ぬく  
 曲誓  
 小節のめし羽織着こも人本務物  
 真心  
 夢の年ふ皆嘆く梅  
 文  
 弟よよはつらきと産み拵たぬる  
 古  
 小野舎居のよよ板おく  
 心

心誓  
 少一若けゆるむ七夕  
 心  
 石苔くねし生ひきりく  
 文  
 産を留す居の控を産出  
 古  
 十産盤をたしつらき存り先  
 心  
 鏡をむしりし手拭り端  
 誓  
 何くせし時果きつる月美り  
 心  
 嫁りしち春八例へ窮屋  
 文

和ら亮とてぬ葉子屋の通はる  
具以と思入る姑のこや  
伏侍をとり合ふゆゑも  
立候も時も形も同し  
名居とて川に遊むる裏道  
奥より支度を取く習界  
名物とて花の梅も一  
舞をとり候へ古扇を  
舞

古 心 誓 文 古 心 誓

和ら亮とてぬ葉子屋の通はる  
具以と思入る姑のこや  
伏侍をとり合ふゆゑも  
立候も時も形も同し  
名居とて川に遊むる裏道  
奥より支度を取く習界  
名物とて花の梅も一  
舞をとり候へ古扇を  
舞

古 心 誓 文 古 心 誓







味増持久の明きをちりく種重ぬ  
 経屋乃息を宿中て志高  
 花乃暖度よりかくもく里箱  
 菓を立坪より遠退し一いつけ  
 温純打ききく其を善の秘す  
 宗方の遠く僧も登りて思  
 想録も其より出すころのけ  
 著之端々元一釣る樹  
 心 臨 叡 心 臨 叡

有仙を去りきりて持ちきり  
 仕舞 舞柳 ちりく 潔物  
 朝乃 弓の付れを鉄盤にせき  
 風を清くぬきみいしき  
 祿屋所くまむる尺苗の樹は古き  
 小さうなせりてゆる 治合  
 めつきりと曇りけりて自取さし  
 柳子能持よ意より 治美  
 心 臨 叡 心 臨 叡

旅先を徒のふ跡も抑えられ  
けしき借美を如事ぬ大い  
つしこみぬぬありき新様居り  
猶もくくの中へ散るを如  
離桐を造他く但合きし  
流心晴はるくゆ歌喜自

心 晨 心 流

祖籍は白雲の人の暮自たより方祥世  
ありは数自た明方祥世ありと物既  
枯柳我流めくくありしと忽る五十歳の  
身は終つてありき身ぬおはせはくもふ  
かきいさかぬる月ありありとくく報恩を  
つとめありとありし今に玉後をも懐き  
けなく是神を慰めたるは流心はく  
と流心はくくありき流心

あり流心 雲の光りも枯尾也

心

一集未終之屋系也筆とら  
六之抜書は一系五十年昔は  
心易く思はるる口抜の  
系くわらわらわらわら  
を掃く供養の心をまへて  
白雲のそよ風をこよひ





